

# 千貫神輿を神々しく一伝統の銅鑄

かざり  
とりにえ  
東京・台東 鳥越神社



## かつぎ手は、200人を越す若衆

オリア！ オリア！ オリア！

下腹から絞り出す野太いかげ声が、梅雨入り間もない下町の空気を震わせる。目の前のかつぎ手は、200人近くもいるだろうか？ 印半纏が路地を埋めつくす。

東京・台東区鳥越。江戸下町の趣き色濃く残すこの街を“千貫神輿”がねり歩く。興奮か、酒気か、かつぎ手の若衆の顔は紅潮している。

江戸時代からの大神輿は、震災で焼失したため、昭和2年に原型通りに再興された。実際に渡御される神輿としては都内随一の重量を誇り、通称“千貫神輿”と呼ばれる。

鳥越神社の例祭は、6月9日に近い日曜日に催され、千貫神輿の渡御は、この日に行われる。終日氏子区域23か町をねり歩き、夜

になって神社に戻るときには、各町が高張提灯をかかげ、手丸提灯で迎える。氏子たちのかかげる提灯の灯に、神輿の鳳凰やたくさんの鑄金物がキラキラと夜空を彩る光景は、例えようもないほど美しく、雄壮。

「これをひと目見ようと、毎年数万の人で賑わいます。」第19代鍋木啓磨宮司は言われる。



馬上の鍋木宮司

## 1300年の歴史に彩られる鳥越神社

鳥越神社は、旧蔵前国技館の西400m、通称江戸通り(国道6号線)と呼ばれる旧街道のすぐ脇に位置し、昔から交通の便のよい所であった。現在では、この一帯は“鳥越”と称しているが、平安時代後期までは、白鳥村と呼ばれていた。

鳥越神社の創祀については、日本武尊がかかわっている。

武尊が平定のために、はるばる東国へ赴いた時、しばらくこの地にとどまった。その威徳をしのび、白雉2年(651年)5月、白鳥村の人々は、白鳥山と呼ばれた山上に白鳥明神を奉祀した。これが鳥越神社のはじまりである。1300年を越す歴史をもつ神社なのである。

## 飾りに深みを与える銅

千貫神輿を飾る金色に輝く金物類は、すべて純銅板の鑄に金めつきを施したもの。

この数多い金物類の本体への取付け、補修を行っているのが、この地で三代続く老舗の土屋金属工芸(株)だ。

神社、仏閣などの各種美術金具製作では、東京屈指。鳥越神社の氏子でもある代表取締役 土屋 厚氏は

「浅草橋から田原町にかけて、鳥越神社を中心にした一帯は職人の町です。神輿を作るには、私ら鑄職や鍍金だけでなく、木地、彫り、漆と多くの職人が関わります。昔はこの近隣で職人さんを確保できたものです。それも今は昔。本当に職人さんが少なくなっていました。、伝統技術が心もとないものになってきています。

この千貫神輿の飾りは、渡御の2日前の朝から本体に取付けはじめ、その夜9時の御魂入れまでに作業を完了させます。銅製の金物を微調整しながら取付けるのですが、銅は柔らかく、細工がしやすいので、それほど手間はかかりません。

長年、鑄金物を手がけてきましたが、銅にまさる金属はありませんね。思うように加工できるし、作品に深みが出ます。渡御当日は、職人が終日神輿の後について、万が一の金物の不具合に対処しています。

ともかく、この鳥越一帯の人たちの一年は、祭りではじまり、祭りで終わるんです。祭りあつての鳥越なんですよ。」



小鳥



土屋 厚氏



鳳凰の取付け



わらび手の取付け